



知行院便り

発行／宗教法人知行院

東京都世田谷区喜多見 5-19-2

TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



ごあいさつ

知行院住職 坂本観泰

あけましておめでとうございます。

日々の慌ただしさから解放され、安堵の中で新年を迎えられる幸せを実感されているのではないのでしょうか。

他方、目を世情に転ずれば、現在も戦火に迫われ苦しんでいる方々が、なんと多いことかと心が痛みます。そんな悲しい話を耳にする度、宗祖伝教大師のお言葉を思い出します。

「怨みをもって怨み報せば怨み息まず。徳をもって怨みに報せば怨みすなわち尽く」(ご遺誠)

これは「怨みに対して怨みで返せば際限はない。しかし徳で返せば怨みは終わるのだ」という意味です。

では徳とは何でしょうか。

それは伝教大師のお示しになった「忘己利他」の精神です。「人に怨まれたら、優しい気持ちで赦してあげて、慈悲の心で尽くしてあげなさい」と言っておられます。

また、大無量寿経に「和顔愛語」という言葉があります。「おだやかな顔と思いやりのある話し方で人に接しなさい」という教えです。

人づきあいの際はこの「和顔愛語」を忘れないことが肝要ですが、それでも行き違いがあり、もしも怨まれてしまったら、「忘己利他」の精神でお付き合いしていくことが大事ですね。

戦争に限らず、我々の日常生活の中でも、同様なことがあります。私たちはついこの「怨み」を報復的な行動で返してしまうことが多々あります。

そんな時こそ伝教大師のお言葉を思い返し、慈悲の心で受け止めてみてください、不思議と怨みは息んでいくと思います。

教えて、住職さん！

第十二回 法事と法華経方便品

お寺のこと、仏教のことで、知っているようでよく解らないことを、ご住職にインタビューして教えていただきます。第十一回目は、法事と法華経方便品について解説していただきます。

(聞き手 編集担当 薄井秀夫)

聞き手 一周忌とか三回忌など法事がありますが、その時にどんなお経を読んでいるのですか。

住職 天台宗では、一周忌などの法事の時に、主に法華経の寿量品というお経を読みます。

法華経は、お釈迦さまが衆生を導くために説いた、大乘仏教の代表的なお経です。

法華経には、二十八の品(章)があり、寿量品はその十六番目にあたり、正式には如来寿量品と言います。

お経と言うと難しいという印象があると思いますが、法華経はその中にたくさんのお話が語られ、その物語を通して法を説くというかたちをとっています。

聞き手 その寿量品には、どんなことが説かれているのですか？

住職 寿量品の中で説かれているのは、仏の寿命は不生不滅であり、お釈迦さまは久遠実成の本仏だということ、つまり仏の命は永遠であるということです。

肉体を持ったお釈迦さまは亡くなったことになっているけど、本当はずっと存在し

ていて、法を説き続けているのだと書かれています。仏さまは亡くなった姿を私たち衆生に見せることで、供養の心、教えを求める心を起こさせようとしたのだと、いうことです。

お釈迦さまが亡くなったのは、衆生を正しい悟りに導くための方便だとされているのです。

聞き手 方便ですか？

住職 そうですね。寿量品には、さらに良薬治子の喩え^{たと}という物語が書かれています。

あるところに名医の男がいました。男にはたくさんのお子さんがいましたが、留守中に、子ども達が誤って毒薬を飲んでしまいました。男は家に帰って子どもたちが苦しむ姿を見て、すぐに薬草を調合し、飲ませようとしています。ところが、毒で苦しんでいる、正常な精神状態でない子どもたちは、どうしても薬草を飲もうとしません。

そこで男は、一計を案じます。家を出て他国に向かい、「父は死んだ」という知らせを子ども達に届けさせました。

すると父の死の知らせを聞いて、悲しみあまり子ども達は目を覚まします。そして正常な精神状態になった子ども達は、父の調合した薬草を飲んで、毒の苦しみから救われたのです。そして男は、家に帰り、病の癒えた子ども達と再会するという話です。

父親が亡くなったと、方便で騙して薬を飲ませ、子ども達を救ったという物語です。

お釈迦さまもまたこの喩えのように、苦しむ人々を救うため、この世から姿を消して、仏を求める気持ちを呼び起こしているのです。

聞き手 寿量品には、そうした物語が書かれているんですね。

住職 法事を行うことは、ご遺族の方々が功德を積むことでもあります。法事で功德を積むことは、故人にいただいたご恩に報いる唯一の手段だと言ってもいいでしょう。

お経を読むこと、法華経寿量品を読むこともやはり功德を積むことにつながります。恩を感じている人こそ、心を込めて読誦してください。

法事の際には、お経の本を用意していただきますので、それを手に取り、できるだけ声に出してお経を読んでもいただければと思います。

天台宗ハワイ別院五十周年記念法要 厳修される

令和五年十一月二十五日、天台宗ハワイ別院（ハワイ州ホノルル市ジャックレーン）に於いてハワイ別院開創五十周年記念法要並びにハワイ別院第三代田中祥順住職の晋山奉告法要が、国内外から百二十名のご臨席のもと厳修されました。また、夕刻からはシェラトン・プリンス・カイウラニホテルにて成大に披露バーティーが開催されました。

住職は天台宗海外事業団評議委員として招待を受け式典、披露宴共に参列いたしました。

天台宗ハワイ別院は、一九七三年十一月二十五日に開設されました。

当時既に、日本人移民と共に渡ってきた浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗、真言宗などの諸宗派は、ハワイでの開教八十年、九十年の歴史を持ち、檀家制度の中それぞれ独自に信仰を広めていました。

太平洋戦争によって、一時寺院活動を中断せざるを得ない状況となりましたが、戦争が終わり、日本も敗戦の打撃から立ち直り、経済発展とともに日本の思想や文化

についても、改めて世界から注目されるようになりました。

そこで、日本の仏教のみならず、思想や文化を理解してもらうことと、国際的な相互理解のために、

積極的な役割を果たしていく必要があるという気運が高まりました。当時天台宗宗議会議長であった故羽場慈温大僧正らが中心となつて、まず東西文化の接点であるハワイに別院を開設することになりました。そのハワイ別院初代住職に荒了寛師が任命され一九七三年十一月二十五日に当時の天台座主猊下菅原栄海大僧正御親修のもとに開院式が厳修されました。

荒了寛師が渡米前、狛江明静院内に居を構えておられた事もあり、先々代観雄大僧正と荒住職とは親交があり、翌年の開創一



ハワイ別院での記念法要

周年記念法要には多くの檀家さんと共にハワイを訪れ参拝されています。その参拝記念として寄付された賽銭箱は今も本堂正面に置かれています。現在も円安が取沙汰されていますが、当時は一ドル三百円の時代、相当高額な参拝であったと想像は容易いですが、お帰りになった時の先々代のお顔と大量のチョコレートは当時小学生だった住職の脳裏に今でも焼き付いています。

法華大会広学堅義が厳修されました

比叡山延暦寺において、五年一会で行われる天台宗随一の古儀の法会「法華大会ほつげだいえこう公がくりゅうぎ学堅義」が、令和五年十月一日より六日まで、六会にわたり大講堂において厳修され住職も延暦寺一山住職として法華十講と広学堅義に出仕いたしました。

この法会は、天皇陛下のお代理である天皇使がご登山され、ご聴聞になるので、古来より「勅会ちよくえ」と称し、無量義経一卷、妙法蓮華経八卷、観普賢経一卷の法華三部経あわせて十巻についての論義を行う「法華十講」と、十講終了後に夜儀やぎと呼ばれる夜を徹して行われる「広学堅義」とのふたつの大きな行事で構成されています。



第三夜の門者をつとめる坂本住職（左）

法華大会五巻日（中日）である十月四日は天皇使を迎えて「大行道」、また探題、已講、天皇使の三者が殿上輿に乗り三方から出会い入堂する「三方の出会い」、さらに十歳前後の子ども僧が論義を披露する「稚児番論義」など平安の王朝絵巻きながらに大行事が繰り広げられます。

特に「大行道」は、法華十講における第五巻提婆達多品の論義に先立って行われ、正装した多くの高僧約五十名が威儀師と從儀師に先導されて散華と法華讃嘆という独特の声明を唱えながら大講堂の周囲を行道

します。住職は散華師として堂内に残り、マイクの前でこの声明を唱えその声は境内に響いていたそうです。

また、春から比叡山に籠山修行をしている観嶺君も取持ちというお役で黒子として、広学堅義のお手伝いをさせて頂きました。

山門に続く小径をつくりました

知行院では元来、葬儀を終えて埋葬されるご遺骨は、山門を通って本堂にて迎葬を執行後、墓所にお納めし、親族は路を改め再度山門を通って昇堂して初七日法要を厳修することとなっております。

平成の大改修時に山門を移動し、また砂利をしいたので皆様にはご不便をおかけしておりました。この度境内から山門へのルートをつくり

ましたのでご利用ください。

尚、四十
九日に埋葬



される方も駐車場から直接書院・本堂に上がるのではなくご遺骨だけでも山門から改めてお入りください。

名僧の一言

「道心の中に衣食あり、

衣食の中に道心なし」

伝述 一心戒文 僧最澄

現本堂の落慶記念に旧本堂の天井板に印しお配りしましたので、見覚えのある方もいらつしやるかと思ひます。

道心とは真実を求める意思であり、仏教を学び実践する心をさし、衣食とは、衣食住の生活環境のことです。

道を求めて努力を重ねる向上心があれば、その目的を達成するのに必要な衣食住はおのずとついてくる。一方、衣食住に執着し、ぜいたく三昧の生活を志向する人は、私欲に心が奪われて仕事もなおざりとなり、道を求め自分を高めようとする心は起きてこないということです。